

〈研究ノート〉

インド独立後のヴィクトリア・ メモリアル・ホール（コルカタ）

本 田 毅 彦

はじめに

インド共和国・西ベンガル州の州都であるコルカタ（2001年以前は、カルカッタ）には、ヴィクトリア・メモリアル・ホールという名の施設が存在する。現在、インド共和国政府が保有しているが、その歴史的沿革は複雑である。1947年にインド共和国が誕生する以前、インド亜大陸を支配していたのは英領インド帝国だった。そして同ホールは、その名から明らかなように、英領インド帝国時代に、その「建国の母」とみなされたイギリス国王＝インド皇帝、すなわちヴィクトリア女王の生涯を記念し、あわせて、英領インド帝国の建国の物語を観覧者たちに説明することを目的として建設された。しかし、英領インド帝国は1947年8月15日をもって消滅し、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、今度は、インド共和国の歴史について証言することを、その任務とする施設になった。従って同ホールのありようは、以後、漸次的に変化していくことになる。

筆者は、2011年夏にヴィクトリア・メモリアル・ホールを訪問した。1911年にデリーで行われたインペリアル・ダーバー（新たなインド皇帝の即位をインド社会全体に告知するために行われた、大規模な政治儀礼）に際して、ヴィクトリアの孫であるジョージ五世がカルカッタからデリーへの遷都を発表し、カルカッタは英領インド帝国の首都としての地位を失ったが、2011年は、それからちょうど百年目にあたっていた。しかし筆者の印象では、コルカタにおいて、少なくとも同年8月の段階では、それに触れる言説はほぼ見られなかった。

以下、本稿では、まず、1947年以降、2011年までの間に、ヴィクトリア・メモリアル・ホールが、どのように変化したのかを、筆者が同ホールを訪れた際の観察を交えながら概観したい。ついで、2011年以後の同ホールのありようを確認した上で、同ホールの運営が今後どのようなも

のなるのかについても、推測を試みる。

1 ヴィクトリア・メモリアル・ホールの変化

「国民的指導者たちのギャラリー」の追加

1947年のインド共和国誕生以後、ヴィクトリア・メモリアル・ホールのコレクションには一定の追加がなされ、それらは、主として「国民的指導者たちのギャラリー」と「インド芸術ギャラリー」に展示されることになった。前者は、インド独立に貢献した人物たちの肖像画や、彼らにまつわる記念品から成るコレクションであり、後者は、19・20世紀のインド社会で活躍したインド人芸術家たちの絵画作品、とりわけベンガル出身の作家たちの作品から成るコレクションである。

2011年に筆者が確認した両ギャラリーの状況は、以下のようなものだった。両ギャラリーは、ホール2階の南西部分に設けられており¹⁾、インド芸術ギャラリーは中央ホールに近い側に、国民的指導者たちのギャラリーは、中央ホールから見て、より奥まった部分にあった。指導者たちのギャラリーには、ガンディー、ネルーをはじめとして、インド独立運動の主要な担い手たちの肖像画が多数並べられていた。いずれも同じサイズで正面から描かれており、タッチも共通していることから、同時に制作されたものと思われた。個々の人物の特徴をよくとらえており、丁寧に仕上げられている、と感じた。インド独立前後の時期の彼らの写真、また、彼らが残した手書きの文書なども、肖像画の下に設けられたケースで展示されていた。

1980年代後半から1990年代前半にかけての動き

1980年代半ばの時点で、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、インド社会にとって得難い観光資源の一つであり、カルカッタ居住者にとっての重要なアメニティーの供給地でもあった。それゆえ、それなりに活気は保たれ、博物館／公園として機能し続けていた。しかし、インド共和国政府、西ベンガル州政府、カルカッタ市の政治・文化エリートたちの目には、ホールは、いわば「継子的」な存在として映じていたのでは、

1) 建物2階の南東部分には、2011年夏の時点では、ホールの管理部門が置かれていた。

と思われる。ヴィクトリア・メモリアル・ホールに対する彼らの本音を推測すれば、「カルカッタのランドスケープにおいて、その存在感を認めざるを得ないが、不本意である」、「自分たちのアイデンティティにとって重要な何かを象徴する場所だが、それを認めたくない」、「美術的、文化的活動のためのセンターとしてある程度機能しており、そうした機能を拡大する潜在力も持つが、そのようにさせたいとは積極的には思わない」といったものだったであろう。

いずれにしても、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、インド国家の施設であるのにもかかわらず、それに投入される公的な資金は限られていた。その結果、企画展覧会は頻繁には行われておらず、また、何よりも、メンテナンスが不十分であり、建物、コレクションのいずれについても、経年的な傷みが進行していた。

しかし、1986年に、S・ヌルル・ハッサン (S. Nurul Hassan) 教授が西ベンガル州総督に任命され、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの信託委員会議長 (Chairman of the Board of Trustees of the Memorial) になったことで、事態は変化する (西ベンガル州総督は、自動的にホールの信託委員会議長となる。ただし州総督は、ほぼ儀礼的な存在であり、州政治の実権は州首相が担う)。ハッサンが「ヴィクトリア・メモリアルを、カルカッタにおける学問的、観光的関心の焦点として登場させる」ために、イニシアティブを執ることを決意していたから、であり (1970年代半ばにはハッサンはインド連邦政府の教育大臣であり、既にその頃から、こうした考えを抱いていた)、その結果、ヴィクトリア・メモリアル・ホールには、後述する「カルカッタ・ギャラリー」が設けられることになった²⁾。

また、それとほぼ時を同じくして、ヴィクトリア・メモリアル・ホールのコレクションを補修するための資金が、主としてイギリス側から提供されることになった。「カルカッタ創建三百周年記念財団」が1989年に設立され (1990年は、カルカッタの創建三百周年にあたった)、イギリス社会の様々な団体・個人が、この組織を窓口として募金を行った。同財団から資金の供与を受け、イギリスのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館のスタッフをはじめとして、美術品や歴史的建造物の

2) Hiren Chakrabarti, 'Introduction', in Victoria Memorial (ed.), *Calcutta Gallery: India's first City Gallery* (Calcutta: Victoria Memorial, 1992).

修復に関して、豊富な経験と優れた技能を有する欧米の博物館関係者たちが、ヴィクトリア・メモリアル・ホールのスタッフと協働する形で、ホールの絵画作品の修復と、その保存環境の整備に重点を置きながら、作業を行った³⁾。建物の経年劣化についても一定の調査が行われ、その修復のための提言がなされた⁴⁾。

カルカッタ・ギャラリーの追加

ヴィクトリア・メモリアル・ホールのウェブサイトでの、カルカッタ・ギャラリーについての紹介は、以下のようなものである⁵⁾。「カルカッタ・ギャラリーは、ジョブ・チャーノック（Job Charnock）の時代から1911年まで、カルカッタの歴史と発展について展示している。同ギャラリーは、また、19世紀後半のチトプル街（Chitpur road）の光景の実物大のジオラマも有している。当時、チトプルは〔カルカッタの〕主要なビジネス・センターであり、現在は、ブラバザール地域（Burabazar area）として知られている。」

インドで最初の「シティ・ギャラリー」（ある都市の、歴史・文化の紹介を目的とする施設）をカルカッタに設ける、とのアイデアを提起したのは、ジョージ・カーゾンであり（故ヴィクトリア女王を記念する恒久的な施設をインドに構築すべきだ、と最初に唱えたのも、インド副王＝総督の地位にあったカーゾンだった）、そうしたアイデアを1970年代半ばに復活させたのがインド連邦政府教育大臣のハッサン教授だった、ということになる。

3) Philippa Vaughan, 'Introduction', in Philippa Vaughan (ed.), *The Victoria Memorial Hall Calcutta: Conception, Collections, Conservation* (Mumbai: Marg Publications, 1997), pp. 1–7. ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館は、イギリス東インド会社が解散した際、同社の保有していたコレクションの主要な部分を継承した。Sathnam Sanghera, *Empireland: How Imperialism Has Shaped Modern Britain* (London: Viking, 2021), pp. 54–55.

4) 文化財保存修復研究国際センター（International Centre for the Study of the Preservation and Restoration of Cultural Property）の所長（director）だったサー・バーナード・フィールデン（Sir Bernard Feilden）が調査を行い、1992年に報告書を提出した。James Simpson, 'The Conservation of Britain's Heritage in India', *The Building Conservation Directory*, 2017 (<https://www.buildingconservation.com/articles/conservation-heritage-india/conservation-heritage-india.htm>).

5) <https://www.victoriamemorial-cal.org/home/content/en>.

1988年11月、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの信託委員会議長になっていたハッサン教授は、「カルカッタ創建三百周年に関する歴史的観点」と題する「ブレイン・ストーミングのための国際的セミナー」を企画し、専門家たちを招待した。そして、常設の「カルカッタ・ギャラリー」をヴィクトリア・メモリアル・ホールに新設してはどうか、とのアイデアを提案し、参加者たちからの賛同を得た。

「カルカッタ・ギャラリー・サブコミティー」が設置され、アシン・ダスグプタ (Ashin Dasgupta) 博士と、バルン・デ (Barun De) 博士がデザイン・コンセプトを担当することになった。次いで、国立デザイン研究所 (National Institute of Design) の所長であるヴィカス・サトワルカル (Vikas Satwalkar) がギャラリーの構築を監督し、助言することになった。ギャラリー構築の実務は、タングラム・デザイン社 (Tangram Design Pvt. Ltd.) のトリディベシュ・サンヤル (Tridibesh Sanyal) と、シッドダルタ・ゴーシュ (Siddhartha Ghosh) の指揮下で行われた。ギャラリーの学事面の整備を統括したのは、当時、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの事務局長兼学芸員 (Secretary and Curator) の地位にあったヒレン・チャクラバルティ (Hiren Chakrabarty) だった。

カルカッタ・ギャラリーは、1992年に開場した。開場以後、ホール1階の南西部分に配置された同ギャラリーは、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの展示活動において、基軸的な役割を担うようになった。そこでの展示や解説の仕方が、ホールの他のギャラリーに比べると、際立って近代的で充実したものになっていたから、である。

2 2011年前後の時期の、ヴィクトリア・メモリアル・ホール

以下では、筆者の実見を交えながら、2011年前後の時期のヴィクトリア・メモリアル・ホールの状況について、紹介したい。この頃、同ホールはインド国外からの観光客を多く集めており、例えば2012年5月には、ヒラリー・クリントン米國務長官が同ホールを訪問した。現代インド社会の右派に属する政治コメンテーターであり、国会議員 (上院議員) でもあるスワパン・ダスグプタによれば、ヒラリー・クリントンは、ヴィクトリア・メモリアル・ホールのほかに、ラ・マルティニエール学校、ソナガチの売春街も訪れており、これらは、外国からの賓客がコルカタ

訪問を行う際の「定番」になっていた⁶⁾。

カルカッタ・ギャラリーの状況

2011年夏に筆者が訪問した時点でのカルカッタ・ギャラリーの状況は、以下のようなものだった。ヴィクトリア・メモリアル・ホールの建物の中では、カルカッタ・ギャラリーと、企画展覧会「シャンティニケタン1929」の会場である、旧ポートレイト・ギャラリーだけに、空調設備が施されていた。他のギャラリーでも、巨大な扇風機が稼働してはいたが、かなりの高温だった。ホールの運営者たちが、カルカッタ・ギャラリーと「シャンティニケタン1929」に力をこめている（訪問者に、より時間をかけて見てもらいたいと思っている）、ということだったのだろう（実際に、他のギャラリーに比べると、観覧者の数は目立って多かった）。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールのウェブサイトでの説明の通り、カルカッタ・ギャラリーの展示目的は、コルカタの歴史を、その誕生から20世紀初頭の時点まで、様々な視角から説明することだ、と感じられた。とりわけ、「バーブー」（カルカッタに現れた、バイリンガル [ベンガル語、英語を使用する] の新興中産階級）に関する解説と、いわゆる「ベンガル・ルネサンス」についての解説が、筆者には印象的だった。経済的に豊かになるにつれて、バーブーたちは、まず、その資産を奢侈のために使ったが、やがて文化的な活動に費やすようになった、との説明がなされていた。

「国民意識 (National Consciousness)」と題するセクションでの、19世紀後半にカルカッタで行われた「ヒンドゥー・メーラー (Hindu Mela)」というイベントについての説明も、興味深いものだった。

ジョティンドラナート・タゴール (Jotindranath Tagore) が、ナブラゴパル (Nabragopal) や、ラジヤナラヤン (Rajannarayan) と共に、1865年に愛国者協会 (Patriot's Association) を設立した。彼らは、1867年には、以後、毎年一回行われることになる、ヒンドゥー・メー

6) Swapan Dasgupta, 'The cult of Tagore has replaced Karl Marx in Kolkata', *India Today*, 25 May 2012 (<https://www.indiatoday.in/magazine/the-big-story/story/20120604-rediscovering-kolkata-swapan-dasgupta-mamata-banerjee-758555-2012-05-25>).

ラーというフェアを組織した。その目的は、ナショナルな誇りと、独立独行の精神を促進することだった。1880年まで、メーラーは重要なイベントであり、カルカッタ全体を高揚させた。賞品が、芸術家、作家、運動選手たちに与えられた。インドの芸術作品や工芸品の展覧会は、インドの生産者たちを奨励し、インド人たちに、彼ら自身の国について教えることになった。マンモーハン・ボース (Manmohan Bose) の愛国的な演説と、愛国歌の歌唱が、多くの人々を引き付けた。青年時代のラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore) は、メーラーで自作の詩を朗読した。

ベンガル地方の名門であるタゴール家のメンバーが、ヒンドゥー・メーラーの運営に深く関わっていたことが強調されている。同家の一員であるラビンドラナートは、アジア人として初めて、1913年にノーベル文学賞を与えられることになる人物だった。また、ヒンドゥー・メーラーで行われた芸術作品・工芸品の競技会は、1903年のインペリアル・ダーバーに際して、インド副王=総督カーゾンが企画し、実施した「インド美術博覧会」の原型なのでは、と思われた。

1870~1880年代のカルカッタの状況に関しては、「政治意識 (Political Consciousness)」と題するセクションで説明がなされていた。この頃からカルカッタでは「国民運動 (the national movement) に弾みがつき、その指導層に変化が生じた。新しい種類の、持続的な政治的アジテーションが始まった」とされる。他方で、同じ時期のカルカッタの民衆層の生活の変容についても、充実した説明がなされていた。

しかし、デリーへの遷都後のカルカッタの歴史については、ほぼ言及がなかった。カルカッタ・ギャラリーの最末尾は、以下のようなタイトルのセクションから構成されていた。「ベンガル分割 (The Partition)」、「過激主義 (Extremism)」、「英領インド帝国首都の移動 (The Transfer of Capital)」、「カルカッタの精神は生き続ける (The Spirit Lives On)」である。カルカッタからデリーへの遷都の発表に際しては、カルカッタのイギリス人コミュニティからの反発が強かったのに対して、インド人コミュニティの対応は比較的冷静なものだった、と述べられていた。カルカッタのインド人たちは、デリーへの遷都により、かえってベンガルの自律性 (autonomy) が強められることになると思ったからだった、

との説明がなされていた。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、本質的に、イギリス人たちとインド社会の関わりをテーマとする文化施設である。他方、1911年以降は、デリーへの遷都により、カルカッタにおけるイギリス人たちの存在感は決定的に縮小した。従って、そのような性質を持つヴィクトリア・メモリアル・ホールの構成部分であるカルカッタ・ギャラリーで、1911年以降のカルカッタのありようを扱うのは的外れだ、と考えられたのかもしれない。

しかし、1911年を下限とする同ギャラリーの展示内容の設定には、また、別の理由も潜んでいるように思われた。遷都以降、1947年のインド・パキスタン分離独立に至るまでの時期、カルカッタでは、ヒンドゥー教徒とムスリムの間で「コミユナルな対立」が深刻化していった。展示内容の下限を1911年に設定したのは、こうしたセンシティブな問題を扱うことを回避するためだったのではないか。カルカッタ／コルカタの歴史上極めて重要なはずの、インド・パキスタン分離独立の前後にカルカッタで生じた数々の悲劇（1946年8月の虐殺など）については、同ギャラリーでは全く言及されていない。さらに、同ギャラリーの展示全体を通じて、カルカッタにおけるヒンドゥー教徒とムスリムの関係については、説明を避けているように感じられた。

また、これも非常に重要だと思われるが、こうした、カルカッタ・ギャラリーでの説明文は、すべて英語でだけ記されており、ベンガル語、ヒンディー語での説明文は存在しなかった。同ギャラリーを訪れるインド人たちは、すべて（英語を含む）バイリンガル教育を受けた人々だ、との前提に基づくのだろうか⁷⁾。

創立時から存在した諸ギャラリーの状況

ヴィクトリア・メモリアル・ホールの創立時（1921年）から存在した

7) ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、2012年から2018年までの間、ホールの運営状態に関する年次報告書を、そのウェブサイトで公開していた。そこでは、ホールのスタッフ（その大部分は、ベンガル語と英語のバイリンガルである）が、コレクションの説明文をヒンディー語で記することができるように、毎年、定期的に研修会を開いていることが伝えられていた。'Rajbhasa', *Annual Report 2012-13, Victoria Memorial Hall, Kolkata*, p. 27 (<https://www.victoriamemorialcal.org/uploads/annualreport/1496397396AR12-13.pdf>).

諸ギャラリーの展示内容は、インド共和国の誕生以後、どのようになっていたのだろうか。驚くべきことに、と言うべきか、インド独立後に追加された、国民的指導者たちのギャラリー、インド芸術ギャラリーと併存する形で、「ヴィクトリアの生涯を記念し、英領インドの歴史を観覧者たちに説明する」展示内容が、ほぼそのまま、数十年にわたって維持されていた。

しかし、前述のように、カルカッタ創建三百周年記念財団からの資金援助を受け、1990年前後から、ホールのコレクションの修復と、その保存環境の整備が行われることになったため、ホール創立時から存在し、修復の必要性が高いコレクションを展示する諸ギャラリーは、閉鎖されたり、その展示の主要な部分を撤去されたりするなどした。そして、結果的に、こうした状態が2010年代初頭まで続くことになった。

筆者が2011年6月にホールのウェブサイトを開覧した時点では、ロイヤル・ギャラリー（ヴィクトリア女王をはじめとする、イギリス王室のメンバーたちと、彼らのインドのとの関わりにつまわるコレクションを展示する）について詳しい紹介が行われていたのにもかかわらず、その二月後の8月に筆者が実際に訪れてみると、同ギャラリーは閉鎖されたままだった。従って、ホールでのヴィクトリア女王につまわる展示は、ロイヤル・ギャラリーの外に配置された彼女のブロンズ像、大理石像、建物の装飾として嵌め込まれている展示（壁画、レリーフ、碑銘）などを除いて、もはや見るができなかった。また、ジョージ五世夫妻の立像を含めて、ホール内外のイギリス人の政治家／植民地官僚／軍人たちの立像や胸像に関しては、それらの台座に嵌め込まれた碑銘を除いて、説明的な文章が一切見られなかった。ホールの創立時から存在した他のギャラリーも、閉鎖されているか、他の用途に転用されている状態だった。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールのギフトショップで筆者が購入することができたカタログは、四つだけだった⁸⁾。一つはカルカッタ・ギャラリーに関するものであり、他の三つは、同ホールの有する絵画コレクションの中で、英領インド時代にイギリス人たちが作成した、インドの風景やインド人たちの習俗を描いた作品を紹介するものだった⁹⁾。しか

8) ギフトショップは、建物南東部分の1階と2階をつなぐ階段の下で、隠れてでもいるかのように営業していた。

し、ヴィクトリア女王、あるいは英領インド帝国の歴史にまつわるコレクションについてのカタログなどは、販売されていなかった。

企画展覧会「シャンティニケタン1929」

ヴィクトリア・メモリアル・ホール 1 階の北東側のギャラリー（旧ポートレイト・ギャラリー。閉鎖状態のロイヤル・ギャラリーに向かい合う形になっている）では、「シャンティニケタン1929」と題する企画展覧会が開かれており、1929年にラビンドラナート・タゴールを被写体として撮影された、多数の写真が展示されていた。

タゴールは1861年生まれであり、2011年は彼の生誕150周年にあっていた。そのため、2011年には、タゴールの生涯を記念する様々な文化イベントが西ベンガル州およびコルカタの各地で催され、「シャンティニケタン1929」もその一環だった。

タゴールは、コルカタの北方にあり、コルカタから鉄道で2時間ほどの町、シャンティニケタンに、芸術・文化を講ずる大学を創立し、自ら校長を務めていた。1929年に同校を訪れた写真家が、タゴール、学生たち、教職員などの、同校での生活や活動（創作、練習、研究、学習など）の様子を大量の写真に収めており、「シャンティニケタン1929」では、そのコレクションの一部が紹介されていた。

そのような会場（ギャラリー）の中で、ヘイスティングズ、ウェルズリー、ダルハウジー（いずれも、英領インドにおいて「偉人」「英雄」とみなされたイギリス人たち）の大理石像が、場違いに並んでいた（所在無げに、と言うべきか）。前述のように、これらの像については何の説明もなく、また、企画展覧会の趣旨との関連付けも行われていなかった。その存在が無視されるために置かれているようにも感じられた。ヴィクトリア・メモリアル・ホールが、その名称にも関わらず、インド共和国、西ベンガル州、コルカタの歴史を説明するための文化施設へと、その「使命」を完全に変えたことを、入館直後の訪問者たちに明示する意

9) Victoria Memorial (ed.), *Calcutta Gallery*; Victoria Memorial (ed.), *Landscape Paintings in the Victoria Memorial* (Calcutta: Victoria Memorial, 1991); Victoria Memorial (ed.), *India: Land and People, Eighteenth and Nineteenth Centuries* (Kolkata: Victoria Memorial, 2009); Chitta Panda (ed.), *Charles D'Oyly's Calcutta, Early Nineteenth Century* (Kolkata: Victoria Memorial, 2011).

図もあるのか、と思われた。

2011年前後の時期にヴィクトリア・メモリアル・ホールで行われていた、様々な活動

2009年末から2011年半ばにかけての時期、ヴィクトリア・メモリアル・ホールでは、常設展の運営以外に、主として以下のような活動がなされていた¹⁰⁾。

- ・ヴィクトリア・メモリアル・ホール、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館、ブリティッシュ・カウンシルが協力し、2009年12月20日から2010年1月31日まで、「西洋人芸術家たちの描いた、インドの生活と風景—1790年から1927年にかけて作成され、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に所蔵されている油絵と素描」と題する企画展覧会を行った。それに関連するイベントも、2010年1月2、9、16、23、30日に行った¹¹⁾。
- ・ヴィクトリア・メモリアル・ホールとオーストラリア自然文化遺産カウンシルが、「博物館コレクションの注意と管理の諸側面」と題するワークショップを、コルカタ市のロータリー・サダン (Rotary Sadan) を会場として、2010年1月11、12日に行った¹²⁾。
- ・「博物館所蔵工芸品の真正さ」と題するセミナーを、2010年2月19、20日に行った。
- ・「コルカタのラビンドラ・バラティ大学視覚芸術学部の受賞・選定作品」と題する企画展覧会を、2010年3月9日から14日まで行った。3月8日の開場式の主賓は、西ベンガル州総督だった。

10) 本節の内容は、筆者が、ヴィクトリア・メモリアル・ホールのウェブサイトにて2011年6月2日に確認した記述に拠っているが、現在は、これらの説明は同ウェブサイトからは削除されている。

11) ヴィクトリア・メモリアル・ホールとヴィクトリア・アンド・アルバート博物館は、2011年10月16日から12月11日にかけて、コルカタの民衆芸術である「カーリーガート絵画 (Kalighat Paintings)」についての展覧会を、やはりヴィクトリア・メモリアル・ホールにおいて、共催の形で行った。Suhashini Sinha and C. Panda (eds.), *Kalighat Paintings* (Ahmedabad: Mapin Publishing, 2011)。

12) オーストラリアの駐インド高等弁務官事務所が、同ワークショップに関する報告書を、そのウェブサイトに掲示している (<https://india.highcommission.gov.au/ndli/pa0210.html>)。

- ・「文化施設のマーケティング」と題する講演会を、2010年4月12日に行った。
- ・「地球の日」にちなんで、「子供たちが地球の日に芸術を用いて自分たちの意見を表現する」と題するイベントを、2010年4月22日に行った。
- ・「2010年国際博物館の日」にちなんで、「博物館と社会的調和」と題するパネル・ディスカッションを2010年5月18日に行った。
- ・「世界環境の日」にちなんで、「苗を植える」と題するイベントを2010年6月5日に行い、「環境汚染を管理する」と題する講演会も行った。
- ・ヴィクトリア・メモリアル・ホールとオックスフォード大学出版会が、「一箱入りの書物」の刊行会を、西ベンガル州総督官邸を会場として、2010年7月5日に行った。同日の主賓は、西ベンガル州総督だった。
- ・「ヴィクトリア・メモリアル・ホール最上部の天使像を再訪する」と題する講演会を、2010年7月19日に行った。
- ・ムガル帝国時代の細密画に関する講演会を、2010年8月30日に行った。
- ・「世界遺産週間」にちなんで、「チトポア街（Chitpore Road）周辺の歴史遺産住宅」と題する企画展覧会を、2010年11月19日から12月12日までポートレイト・ギャラリーで行い、関連する講演会も、同ギャラリーで11月22、23、24、25日に行った。
- ・ヴィクトリア・メモリアル・ホールの造営決定106周年を記念して、タパン・レイチョードゥリ（Tapan Raychaudhuri）教授が、「19世紀ベンガルにおけるイギリス人たちの存在と社会的変化—幾つかの因果関係」と題する講演を、2011年1月4日に行った。ラムモハン・ロイについてのドキュメンタリー映画の上映も行った。
- ・「書癡」と題する講演会を、2011年1月13日に行った。西ベンガル州総督が司会を務めた。
- ・インド文化財保存研究協会の年次総会を、2011年2月3日から5日まで行った。
- ・「マザー・テレサを描いた50枚の絵」と題する企画展覧会を、2011年3月1日から31日まで行った。2月28日の開場式の主賓は、西ベンガル州総督だった。
- ・「国際女性の日」にちなんで、「19・20世紀インドにおける女性たちのエンパワーメント」と題するパネル・ディスカッションを、2011年3

月8日にポートレート・ギャラリーで行った。

- ・「ホッペのサンティニケタン」と題する企画展覧会の開場式を、2011年4月16日に行った。同日、タゴール生誕150周年に関わる書物の刊行会も行った。
- ・「世界遺産の日」にちなむシンポジウムを、2011年4月18日に行った。西ベンガル州総督もこれに参加した。
- ・「国際博物館の日」にちなむ講演会を、2011年5月18日に行った。
- ・「博物館と記憶」と題するパネル・ディスカッションを、2011年5月23日に行った。
- ・マザー・テレサを写した写真の企画展覧会を、2011年5月30日まで行った。
- ・タゴール生誕150周年記念事業の一環として、ドキュメンタリー映画の上映と、同映画についての講演会を、2011年6月17日にポートレート・ギャラリーで行った。

上記のリストから、この時期のヴィクトリア・メモリアル・ホールの活動には、以下のような目的が存在していたことが窺われる。すなわち、①ホールそのものに関する研究、ホールが所有するコレクションについての研究を進め、その成果を発信する。②コルカタの生み出した「偉人」たち（ローイ、タゴール、マザー・テレサなど）をテーマとする啓発的なイベントを、定期的に行う。③イギリスをはじめとする、各国の指導的な文化機関と連携し、種々の文化・芸術活動を行う。④インドの他の博物館・美術館を牽引する立場にあつて、コレクションの管理・保存や、博物館・美術館の運営に関する学会、セミナー、講演会などを開催する。また、国境をまたいで博物館どうしの協働を促進するためのイベントも行う。⑤今日的なテーマである、子供、環境、女性などの社会問題について、博物館・美術館の立場から取り組む、である。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールで行われるイベントでは、その主賓として、西ベンガル州総督がしばしば登場していた。もちろんこれは、西ベンガル州総督がホールの信託委員会議長でもあるからだろうが、現在もホールが西ベンガル州において享受する「文化的威信」の高さも示している、と考えられる。

他方、一般のコルカタ住民は、コルカタ社会全体にアメニティーを提

供しようとするヴィクトリア・メモリアル・ホールの側面を、どのように受け止め、活用していただろうか。ホールへの入場料に関しては、インド国民と外国人観光客との間で大きな差が設けられており（後者は、前者の十倍以上の支払いを求められた）、また、建物に入らずに庭園を散策するだけであれば、さらに安価だった（2004年までは、庭園への入場は無料だった）。従って、インド国籍のコルカタ住民にとっては、比較的気軽に訪れることのできる場所であり続けていた。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールの庭園に関して、ホールのウェブサイトでは、2011年6月時点で、以下のような記述が見られた。庭園は24人の庭師たちによって維持されており、さらに、「モーニング・ウォーカーたち」が、四つの「協会（association）」を構成している。これらの「協会」との間でホールは公式の関係を有していないが、そのメンバーの大半は、カルカッタの「裕福で、有名な人々（the rich and famous）」（つまり、「セレブ」ということであろう）である、と。

夜間には、ホールの建物のライトアップが行われていた。ライトアップが始まったのは1988年1月からであり、そのためのイニシアティヴを執ったのは、当時、西ベンガル州総督だったヌラル・ハッサン教授、TISCO（インドの代表的な製鉄会社）の経営者だったルシー・モディ（Russi Mody）、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの事務局長兼学芸員だったヒレン・チャクラバルティだった。また、ライトアップだけでなく、ホールを舞台として用いる「光と音の祭典（Light & Sound, Son-et-Lumière）」も定期的に行われていた。これは、ホールとベンガル商業会議所の合弁事業として制作されたショーであり、「誇りと栄光—カルカッタの物語」と題されて、英語版とベンガル語版で上演された。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、コルカタの若者たちの間で、ロマンチックな雰囲気を提供する場所として、人気のデート・スポットにもなっていた¹³⁾。映画「その名にちなんで（The Namesake）」では、見合いを終えた主人公二人が、同ホールを訪ね、庭園での散策を楽しむ

13) クシャナヴァ・チョードゥリは、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの庭園の現況に関して、以下のように記している。「メモリアルの前の芝は、子連れの家族のためにある。そこはカルカッタで、自由にひじを使えるだけの余地のある、唯一の場所だった。建物の裏手は、カップルのために非公式に予約されている。」Kushanava Choudhury, *The Epic City: The World on the Streets of Calcutta* (London: Bloomsbury Circus, 2017), p. 94

情景が描かれている¹⁴⁾。

むすびに代えて—ヴィクトリア・メモリアル・ホールは何処へ

ヴィクトリア・メモリアル・ホールを筆者が訪れた2011年には、同ホールの所在地である西ベンガル州において、重大な政治的変動が生じていた。そして、その余波が、やがてヴィクトリア・メモリアル・ホールにも及ぶことになった。

1977年から2011年までの三十年以上にわたり、西ベンガル州ではインド共産党マルクス主義派が政権を掌握していた。そして同政権は、西ベンガル州に住む民衆の生活環境の改善を最優先の課題とし、文化施設の維持・発展などは後回しにした、とされる。その結果、ヴィクトリア・メモリアル・ホールのような英領インド時代に関わる文化遺産・施設は、取り分けて「冷や飯」を食べさせられることになった、と考えられる。しかしインド共産党マルクス主義派は、2011年の4・5月に行われた西ベンガル州の州議会選挙で大敗を喫し、マムター・バナルジー (Mamata Banerjee) を州首相とする、全インド草の根会議派の政権が5月20日に成立した。

前述のように、1990年前後の時期には、インド共産党マルクス主義派の政権下ではあったが、州総督ハッサン教授のイニシアティブと、カルカッタ創建三百周年記念財団からの援助により、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、一時、息を吹き返すかのように見えた。しかし1993年にハッサン教授が州総督の地位を退くと、再び長い沈滞期が始まった。カルカッタ・ギャラリー、国民的指導者たちのギャラリー、インド芸術ギャラリーだけを十全な状態で公開し、ロイヤル・ギャラリーをはじめとする、ホールの創設時から存在したギャラリーは、コレクションの補修と、その保存環境整備の必要を言い訳にして、ほぼ二十年近くにわたり、閉鎖されるか、企画展示のための会場などに転用された。

そして筆者は、西ベンガル州における政権交代の直後に、ヴィクトリア・メモリアル・ホールを訪れた。つまり、ホールの運営状態が、その

14) インドからアメリカ合衆国へ移住した家族の姿を描いたベストセラー小説を、インド出身の映画監督ミラー・ナーイル (Mira Nair) が映画化し、2006年にリリースされた。

歴史上、おそらく最も低調だった時期、ないしは、一定の変化への胎動が始まりつつあった時期のホールを目にした、ということになる。

2012年に入ると、全インド草の根会議派が掌握した西ベンガル州政府が、ヴィクトリア・メモリアル・ホールに大規模な修復とリノベーションを施すことを決定し、インド連邦政府からの資金援助を得て、2013年から2015年にかけて作業が行われることになった¹⁵⁾。スコットランド出身で、歴史的建造物の保存・修復の専門家であるジェイムズ・シンプソン（James Simpson）に建物の診断が委ねられ、その調査結果に基づいて、工事が始められた¹⁶⁾。今回は、建物の修復と展示施設のリノベーションに重点が置かれており、そのため、ロイヤル・ギャラリーに加えて、国民的指導者たちのギャラリー、インド芸術ギャラリーも閉鎖された¹⁷⁾。ホールは、それ自体が歴史的建造物であり、その保存に慎重を期さねばならないが、他方で、展示機能の現代化も進めなければならない、という矛盾を抱えていた。こうした課題を解決するために、ホール敷地の南東部分にあった旧従業員寮を改装し、ホールの管理部門をそこへ移動させ、展示機能を拡充するためのスペースを確保した¹⁸⁾。ついで、特に傷みが深刻になっていた建物の外壁部分の修復が行われた¹⁹⁾。こうした活動全般を現場で統括したのは、2013年半ばに、スワパン・K・チャクラヴォルティ教授（Swapan K. Chakravorty）からホールの事務局長兼学

15) 'Modernization Programme', *Annual Report 2013-14, Victoria Memorial Hall, Kolkata*, p. 34 (<https://www.victoriameorial-cal.org/uploads/annualreport/1496397708AR13-14.pdf>).

16) 'Victoria Memorial Hall to get mega makeover', *The Times of India*, 4 July 2012 (<https://timesofindia.indiatimes.com/city/kolkata/victoria-memorial-hall-to-get-mega-makeover/articleshow/14663892.cms>). シンプソンは、2012年中にホールの建物の診断を行った。James Simpson, 'The Conservation of Britain's Heritage in India', *The Building Conservation Directory*, 2017 (<https://www.buildingconservation.com/articles/conservation-heritage-india/conservation-heritage-india.htm>).

17) 'The Galleries', *Annual Report 2014-15, Victoria Memorial Hall, Kolkata*, p. 7 (<https://victoriameorial-cal.org/uploads/annualreport/1496397780AR14-15.pdf>).

18) ただし、既に2003年の段階で、ロンドン在の建築事務所である Kilburn Nightingale Architectsが、カルカッタ創建三百周年記念財団からの委嘱を受けて、図書館・博物館・ビジターセンターの機能を備えた付属施設を、ヴィクトリア・メモリアル・ホールに新たに設けることを提案していた (<https://www.kilburnnightingale.com/ourwork/current/vmhkolkata.html>)。

芸員のポストを引き継いだ、ジャヤンタ・セングプタ教授（Jayanta Sengupta）だった²⁰⁾。

他方、インド連邦レベルでは、2014年4・5月に行われた総選挙の結果、インド人民党が、インド国民会議派に代わって政権を担うことになった。インド人民党は2019年4・5月の総選挙でも勝利し、ヒンドゥー・ナショナリズムの色彩を強めていった。そして近年、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの運営は、連邦レベルでの、こうした政治上の変動からも直接的な影響を受け始めている²¹⁾。

2019年7月には、インド人民党の大物政治家だったジャグデーブ・ダンカー（Jagdeep Dhankhar）が、西ベンガル州総督に任命された。そして、このダンカーのリーダーシップの下で、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの運営方針は、ヒンドゥー・ナショナリズムの方向へと転換されつつあると考えられる。ホールの年次報告書は、2017・2018年期的ものを最後として、現在に至るまで、ホールのウェブサイトで公開されていない。ホール内で、その運営方針をめぐる、何らかの対立が生じているからなのでは、と想像される。事務局長兼学芸員のセングプタ教授は、リベラルな立場の歴史家であり、連邦レベルでインド人民党政権が成立する以前に、既にホールの事務局長兼学芸員の地位に着いていた²²⁾。ヒンドゥー・ナショナリズムを打ち出そうとするダンカーの方針

19) 'Modernization Programme', *Annual Report 2014-15, Victoria Memorial Hall, Kolkata*, p. 31 (<https://victoriameorial-cal.org/uploads/annualreport/1496397780AR14-15.pdf>).

20) チャクラヴォルティ教授も、2012年6月の時点で、ヴィクトリア・メモリアル・ホールを「急いで近代化する必要がある」と認めていた。Ananya Gupta, 'A piano with a history', *The Hindu*, 21 June 2012 (<https://www.thehindu.com/features/friday-review/history-and-culture/a-piano-with-a-history/article3555664.ece>).

21) 2015年には、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、インド人民党政権により、「インドにおける最も清潔なモニュメント」に認定された。'Victoria Memorial Hall', *Annual Report 2016-17, Victoria Memorial Hall, Kolkata*, p. 5 (https://victoriameorial-cal.org/uploads/annualreport/1539251226Annual_Report_English-min.pdf).

22) セングプタ教授はコルカタの出身だが、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの事務局長兼学芸員になるまで、アメリカ合衆国・インディアナ州のノートルダム大学で教鞭を執っていた。Matthew Keough, 'AHA Members Spotlight: Jayanta Sengupta', *Perspectives on History*, 21 May 2018 (<https://www.historians.org/publications-and-directories/perspectives-on-history/march-2018/aha-member-spotlight-jayanta-sengupta>).

に対して、セングプタ教授が諸手を挙げて賛成しているとは考えにくい。

2021年1月からは、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの一階部分のギャラリーすべてを用い、「抑圧されないスバス（Irrepressible Subhas）」と題して、カルカッタ出身で、20世紀前半のインド独立運動のカリスマ的指導者の一人だったスバス・チャンドラ・ボースについての、大規模な企画展覧会が行われた。同展覧会の開場式には、インド人民党政権のモディ首相も参加しており、同展覧会が、いわばインド人民党の「肝いり」で行われたことを示している²³⁾。さらに、モディ首相が、ヴィクトリア・メモリアル・ホールの名称をボースにちなむものに変更することを考えている、との報道が行われた²⁴⁾。しかし、こうした考えにボースの遺族・子孫たちは反対であり²⁵⁾、また彼らは、今回の企画展覧会の展示物の中には「フェイク」が含まれている、との批判すら行った²⁶⁾。

ヴィクトリア・メモリアル・ホールが完成したのは1921年であるため、2021年は、その百周年にあたっている。「抑圧されないスバス」は、そうした事情を逆手にとって利用しようとする、インド人民党政権の広報戦略の一環であろう。現在、ヴィクトリア・メモリアル・ホールは、博物館・美術館として、一定の活力を回復し始めているが、その歴史的な沿革から、再び、人々の記憶の仕方をめぐる政治的抗争の場にもなりつつある、ということであろうか。

23) 同展覧会は、ボースの生誕125周年を記念するために企画された。'From LAC to LOC, world witnessing India's powerful avatar once envisioned by Netaji: PM Modi', *India TV News*, 23 January 2021 (<https://www.indiatvnews.com/news/india/parakram-diwass-pm-modi-kolkata-netaji-subhas-chandra-bose-125th-birth-anniversary-latest-news-679994>).

24) 'Kolkata's Iconic Victoria Memorial May Be Renamed As A Tribute To Netaji & Azad Hind Fauj', *Republicworld.com*, 21st January 2021 (<https://www.republicworld.com/india-news/politics/kolkatas-iconic-victoria-memorial-may-be-renamed-as-a-tribute-to-netaji-and-azad-hind-fauj.html>).

25) 'Don't rename Victoria Memorial after Netaji: Kin', *The Times of India*, 22nd January 2021 (<https://timesofindia.indiatimes.com/city/kolkata/dont-rename-victoria-memorial-after-netaji-kin/articleshow/80396229.cms>).

26) 'One of Netaji's relics at ongoing Victoria Memorial exhibition fake: Expert', *Business Standard*, 7 February 2021 (https://www.business-standard.com/article/current-affairs/one-of-netaji-s-relics-at-ongoing-victoria-memorial-exhibition-fake-expert-121020700498_1.html).